

## パリのカメラショー「SALON de la PHOTO」視察

2025年10月9日から12日にかけてフランス・パリ19区のヴィレット・グランド・ホール(Grande Halle de la Villette)で開催された「サロン・デ・ラ・フォト(Salon de la Photo)」を視察した。ドイツのフォトキナ、日本のCP\*に次ぐ規模のカメラショーとして2007年から現在の形態で開催され、2011年にはフランスの写真工業会 SIPEC の依頼により日本カメラ博物館ブースが提供された。「30 ANS DE PHOTO NUMERIQUE(デジタル写真の30年)」と題した展示では、「ソニーマビカ試作機」をはじめ120点のカメラを現地に持ち込み、デジタルカメラ発展史を実機で解説し、大変な盛況を博した。

日本カメラ財団としては、コロナ禍による中断を経て昨年より視察を再開している。国内の展示会では来場者のニーズやリアクションはある程度予測が見込めるが、フランスの展示会における出展各社のブースや会場の様子は日本のとはまた異なり、海外の主要マーケット生の声を知るうえでも貴重な機会といえる。まず日本と異なるのが展示場そのものの様相であろう。

会場のヴィレット・グランド・ホールは、もとは1867年に建造された食肉工場で、1970年にパリ市から政府へと譲渡された数年後に操業を停止し、改装を経て1979年にフランスの歴史的建造物に指定された。周辺は公園として整備され、現在は多目的ホールとして展示会のほかさまざまなイベントが行われている。メインホールの屋内面積は約9,000平米で、約20,000平米のパシフィコ横浜と比べて半分弱。中央部は半地下で立体的なフロア構造となっており、ブースに利用できる面積はCP\*の実質1/3程といった印象である。館内は天井まで吹き抜けで、内壁に沿って2階フロアが囲んでいる。

会場全体のブース構成は日本のCP\*と似ており、1階の中心はキヤノン、ニコン、ソニー、富士フイルム、リコー、シグマ、ライカがブースを構え、その周囲にフランスの写真用品メーカーや出版社などがブースを出展していた。各社ともCP\*と同様に最新機種タッチ&トライがメインだがCP\*比べ小規模であり、ジオラマなどの造りこみはわずかでメーカースタッフとの対話に重きを置いているようであった。とはいえカメラに対する熱量は日本と変わりはなく、操作しながら熱心に質問する様子を各ブースでみることができた。

写真用品はスタジオ用のライティング機材やカメラバッグを扱うブースなどが多く出展。そのなかで扱われていた「Shimoda」という日本的な名称のカメラリュックはアメリカメーカー製だが、創業者の



展示会場



Zooms 展示

ひとりであるイアン・ミラー氏が日本に 15 年近く暮らしていたことがその名に反映されているようである。パリでは各所で日本的なモチーフを目にする機会があり、日本文化はすでにブームを超えて一般に定着していると感じられる。

フィルムを扱うブースも複数みられた。代理店などの各社が協賛して「The Analog Chronicles」と題したフィルムの魅力再発見プロジェクトを展開しており、このところ日本でもきかれるフィルム回帰のような現象はフランスでも同様と思われた。

2 階部分はプリント出力などを中心としたプロ向け企業がブースを構え、日本メーカーではエプソンがブースを出展しており、フランス企業では写真印刷向け機材のソリューションビジネスを展開する TETENAL が比較的大きめのブースを構えていた。

同じく 2 階フロアには写真展示や書籍販売コーナーも設けられ、写真展では、CP+と連携している気鋭の写真家にスポットをあてる Zooms、ローマの出版社コントラスト社と同社が設立したフォルマ財団のコレクション展、国際料理写真フェスティバル、戦場を撮影した写真家に贈られるバイユー賞受賞写真など、数々の写真作品が展示されていた。屋外ではキッチンカーがランチを提供し、最終日にはカメラの蚤の市も開催された。

一般的にはスマートフォンによる写真撮影が浸透して久しいが、写真の故郷・パリでこのような展示会を視察すると、写真を撮る行為そのものの楽しみや、カメラという道具への期待は変わらず熱を保ち続けているように感じられる。同志が集うイベントの心地よさにほだされつつも、今後も Salon de la Photo をはじめ海外のカメラ業界や写真事情を冷静に注視していきたい。

(文化部部长 山本一夫)